

生成と蕩尽のあいだで(要約)
守永直幹

1)ひとことで「成ること」と言っても、実際には多様な要素が流れ込んでいる。成り切らずに終焉するものもあれば、成り果てて頑強に存続するものもある。「成り行くもの」は成り終えたものとしての過去、成りつつあるものとしての現在、成ることが呼び寄せられる未来という複数の時間層のなかで、その緊張を孕んだ流れのなかで生成変化する。それは空間なき空間、場所なき場所である。そうした生成の次元を「成り行き」としてのみ理解するのでは、ベルクソンやホワイトヘッドの時間論の神髄に触れたことにならない。

2)この「成り終えたもの」の問題は、ホワイトヘッドのなかでは「頑固な事実」とも呼ばれる。生成したものが速やかに消滅すると片づけるだけでは楽観的すぎる。生成を終えたにもかかわらず、必ずしも消滅には至らない残余、残念なもの、その「頑固な事実」こそがリアルなもののリアリティを形成する。

3)死は必ずしも大きな問題ではない。本当の問題は老化であり、劣化であり、衰退である。近代の哲学は《老》の問題に向き合ってこなかった。ヨーロッパ全体を見渡しても、せいぜいモンテーニュやセルバンテス、シェークスピアなどルネッサンスの思想家や文学者ぐらいのものだ。それは彼らが近代の黎明に立ち会いつつ、その夕暮れをも予感し得たからであろう。

4)「成り終えたもの」はどうなるのか。そこにおいて究極的な形で倫理が問われうる。そこにおいて初めて成り行くものの成り行きの総体を見渡すのが可能になる。「成り行き」それ自体に倫理は無い。

6)ホワイトヘッドが文明を決定づける5要素として「真理」「美」「冒険」「芸術」「平和」を挙げたことは有名である。が、これらを字義通りに受け取るだけでは彼の真意を見逃すことになる。真理の対極には虚偽が、美の対極には醜が、冒険の対極には停滞が、芸術の対極には気晴らしが、平和の対極には戦争があるはずだ。その両極を見ねばならぬ。むしろ文明は悲劇的終焉を運命づけられている、というのが彼の本音であろう。フェイク、醜悪なもの、社会の停滞、大衆向けカルチャー、戦争。この5要素こそが現代文明の本質を成す。むしろ私たちとしては、その現実から出発せねばならない。それこそが具体的にものを考えるということである。

○両極化→差異化→多元化
×一極化→統合化→一元化